

平成30年7月18日(水)

老球の細道426号

子どもの指導における怒りの影響

会津バスケットボール協会 室井 富仁

楽しみは最後に残しておけ。爺の毎日のささやかな楽しみは夕食のビールと孫をベビーカーに乗せながらの町内散歩である。内孫の2番目が外の世界に興味関心を示すようになり、何かと私に散歩をアピールするようになった。私のトレーニングと一石二鳥である。

「三つ子の魂百までも」と脳科学で言われるように、孫は今が一番脳が学習する時である。きれいな花があったら教えてやり、猫や犬に出会ったら本物に触れさせたりで爺ながら色々気を使う。先日散歩中に雨が降ってきたので雨に関する童謡を歌って聞かせようと思いい「雨、雨、降れ降れ、母さんが♪」の歌を歌おうと思ったら、「雨、雨、降れ降れ、もっと降れ♪」の八代亜紀『雨の慕情』になってしまった。孫の未完成の脳に変な刺激を与えたのではないかと悔やみながら家路に着いた。幼少の頃から歌謡曲に親しみ、童謡を真面目に唄ってこなかったつけが今になってきている。

『コーチングクリニック』2018年8月号「運動部活動における体罰の影響」に衝撃的な記事が掲載されていた。虐待や体罰を受けると、脳の大事な部分に「傷」がつくという。子どもの時に受けた体罰や虐待などをアメリカでは「マルトリートメント」と言い「不適切な養育」と和訳され、子どもの健全な発達を防げるものとされている。

著者がハーバード大学と共同で、子ども時代に体罰を受けた経験がある18歳～25歳の若者約1500人のうち、一定の条件に合う被験者にMRIを使い脳の変化を調べた結果、厳しい体罰により前頭前野の容積が19・1%減少することがわかった。20代後半までゆっくり成熟する前頭野の一部が壊されると、うつ病に類似した症状が出やすくなる。

言葉の暴力も聴覚野を変形させることもわかった。暴言を浴びせられた子どもは、言葉の理解力などが低下し、心因性難聴になりやすいそうだ。また、身近な大人の暴言や暴力を繰り返し見聞きするときも、脳の視覚野という部位が委縮するというデータもある。それは、目から入る情報を最初にキャッチする力や記憶する力が弱くなり、知能・学習能力が低下する可能性が指摘されている。

マルトリートメントは教育やスポーツの現場でも存在する。マルトリートメントが頻度や強度を増したとき、子どもの脳は部位によって委縮したり、肥大したりするなど、物理的に損傷する。その結果、学習意欲の低下や非行、心の病に結びつく危険性があるという。

これらを踏まえて著者は部活動の指導者に次のような提言をしている。①子どもの脳に影響を及ぼす影響を理解し、体罰、暴言による指導はNO(脳)！②大人と子どもは対等な力関係ではないという前提に立つこと③指導者は、爆発寸前のイライラをクールダウンすること④子どもの気持ちと行動を分けて考え、成長を応援すること。

本来「しつけ」とは、子どもに恐怖を与えることではなく、正しく導くことが目的でなければならない。コーチの神様ジョン・ウッデンは言う「恐怖心でなく誇りで人を動かす。誇りを持っている人物か、罰を恐れている人物か、あなたならどっちの人物と一緒に仕事をしたいか。それは簡単な選択だ。相手に敬意を示してはじめて相手は誇りを持つ。このことを忘れてはいけない。子どもも大人も同じ」。

選手(子ども)は指導者の愛情と思いやりを理解した時、指導者の声に耳を傾ける。